

国民休暇村の景観構成の特徴とその評価に関する研究

—近江八幡と大山鏡ヶ成を事例に—

加治 隆¹ 油井正昭²

Study on the structural feature of the landscape and evaluation of the landscape in the National Park Resort Villages

— Focusing on the evaluations of Oumi and Daisen Resort Village —

Takashi Kaji¹, Masaaki Yui²

Abstract

The purpose of this study is to find out how visitors evaluate the surrounding landscape and the view from the hotel at Oumi-hatiman National Park Resort Village (Oumi Resort Village) and Daisen-kagamiganaru National Park Resort Village (Daisen Resort Village)

The evaluation of the surrounding landscape and views were conducted by questionnaire from October 1st to the 31st in 2002. There were 12 criteria evaluated by the questionnaire and there was one view chosen as the most impressive by visitors.

Oumi Resort Village and Daisen Resort Village received high marks from visitors for their surrounding landscape and views. In particular, the quality of the natural environment, unobstructed views and the soothing and aesthetical value were given the highest praise. Visitors gave lower marks to the variety and visibility of wildlife.

The visitors were given 4 features of landscape elements of the area for evaluation : mountains, forests, headlands and picnic grounds. As a result, the Okinoshima Island located near Oumi Resort Village and picnic grounds in Daisen Resort Village were chosen as the most impressive landscape elements.

1. 研究の背景と目的

国民休暇村(平成13年(2001)に「休暇村」と改称。以下「休暇村」とする。)は、国立・国定公園の集団施設地区計画に基づいて宿泊施設を中心に園地、野営場、スキー場などを整備し、国民の風景観賞、休養、野外レクリエーションに資する自然公園利用の拠点である。休暇村は昭和36年(1961)から国および都道府県並びに(財)休暇村協会が整備し、管理運営は(財)休暇村協会が行な

っている。

現在、休暇村は図1に示すとおり全国に36カ所、平成17年度の利用者数は389万9千人に及んでいる。休暇村(集団施設地区)に関する研究としては、休暇村の計画に関する研究¹⁾、集団施設地区の立地タイプの研究²⁾、集団施設地区の景観に関する研究³⁾、休暇村におけるインタープリテーションに関する研究⁴⁾、休暇村の空間構造に関する研究⁵⁾などがあるが、休暇村の景観構成、評

1 東京環境工科専門学校 Tokyo Collage of Environment

2 桐蔭横浜大学医工学部 Faculty of Biomedical Engineering, Toin University of Yokohama

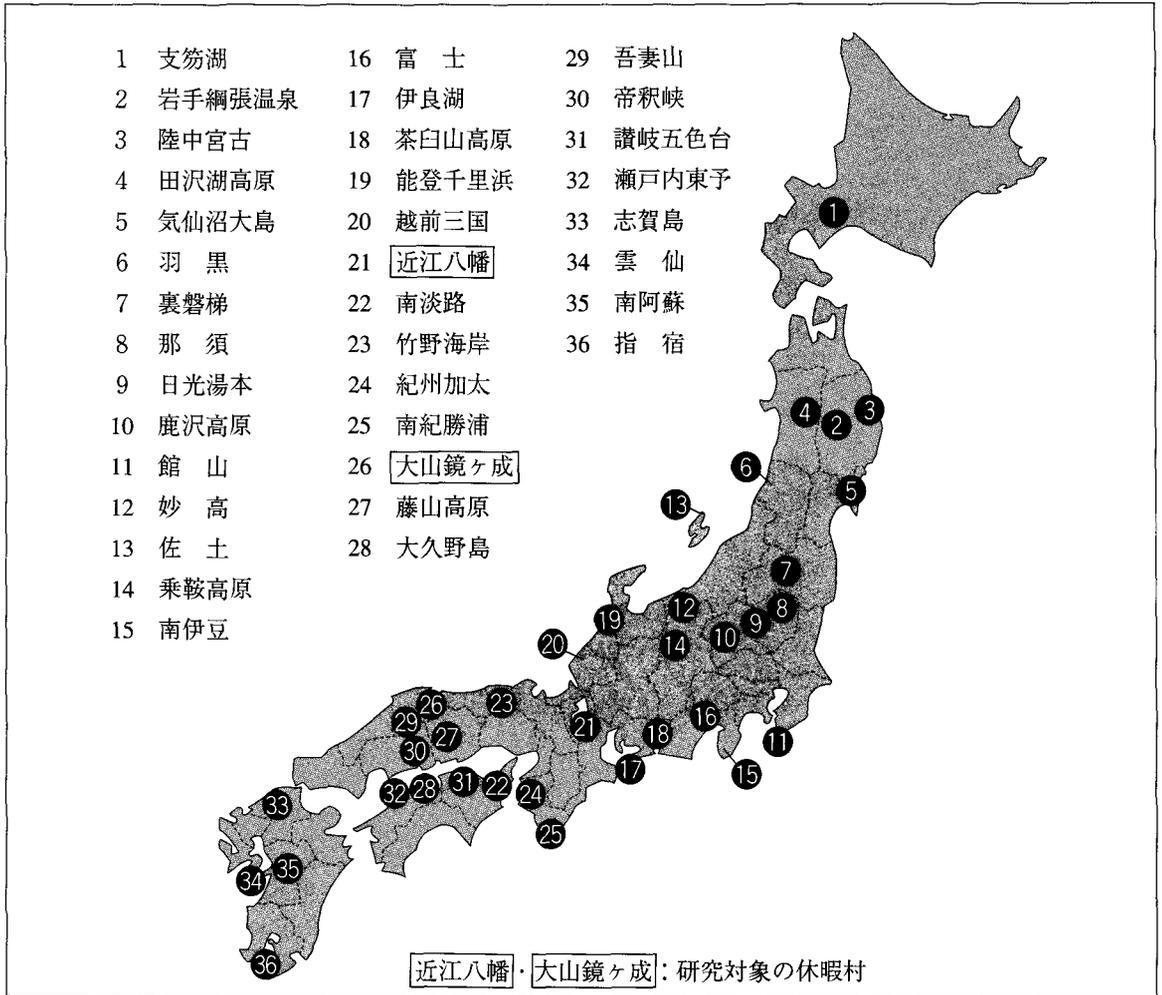


図1 休暇村の立地分布(2006年現在)

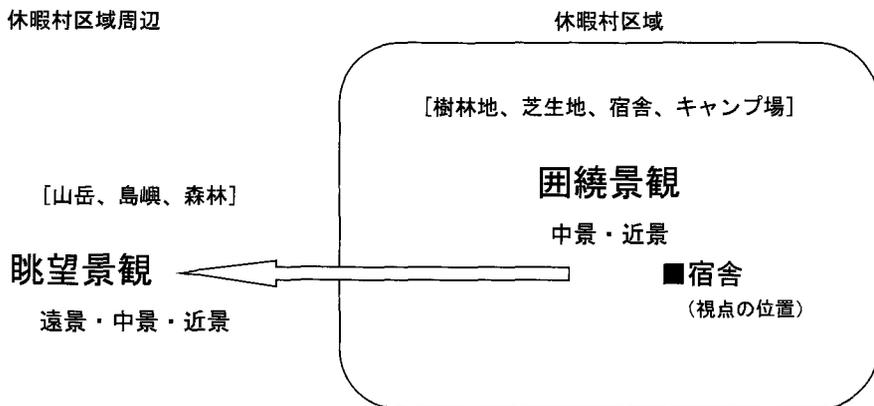


図2 休暇村の景觀区分

価に関する研究は行なわれていない。

本研究は、休暇村区域内における施設空間を中心とする圍繞景観、休暇村区域周辺の主要な眺望対象を展望する眺望景観に分け、それぞれの景観について休暇村来訪者に対するアンケートによって評価を行い、その結果を分析・検討して、休暇村景観の特徴および立地や施設との関連について考察することを目的とした。

2. 研究方法

(1) 研究対象の休暇村

研究対象の休暇村は、36ヵ所のうち立地環境の異なる2ヵ所とした。水辺の休暇村として休暇村

近江八幡(以下「近江八幡」とする)を、山地の休暇村として休暇村大山鏡ヶ成(以下「大山鏡ヶ成」とする)を選定した。

なお、近江八幡は琵琶湖国定公園に、大山鏡ヶ成は大山隠岐国立公園に存在する。

(2) 景観区分とアンケート内容

休暇村の景観を、松井孝子、酒井学の研究論文⁶⁾を参考に、休暇村区域内の身のまわりの景観として認知される景観を「圍繞景観」、休暇村区域周辺の景観で視覚を通じて認知される景観を「眺望景観」とした(図2)。

表1 圍繞景観の空間と環境

休暇村	区域		施設空間												生きものとの触れ合い空間			
	面積 ha	標高 m	宿泊区			園地区						キャンプ場			樹林地・草原 湿地・沼沢・水辺			
			ha	%	施設	ha	%	植生区分	ha	%	ha	%	施設	ha	%	地形・植生		
近江八幡	14.4	85.3	3.7	26	宿舎 駐車場	3.9	27	I 樹林地	—	—	3.0	21	キャンプサイト キャンプセンター	3.8	26	湖岸・湿地 照葉樹林		
								II 草原	0.8	20.5								
								III 芝生地	2.2	56.4								
								IV 裸地	0.9	23.1								
大山鏡ヶ成	108	915	3.7	3	宿舎 駐車場	13.1	12	I 樹林地	1.1	8.4	6.0	6	キャンプサイト キャンプセンター	85.0	79	湿地・沼沢・水辺 草原・広葉樹林		
								II 草原	6.8	51.9								
								III 芝生地	5.2	39.7								
								IV 裸地	—	—								

注)：標高は宿舎の位置における標高

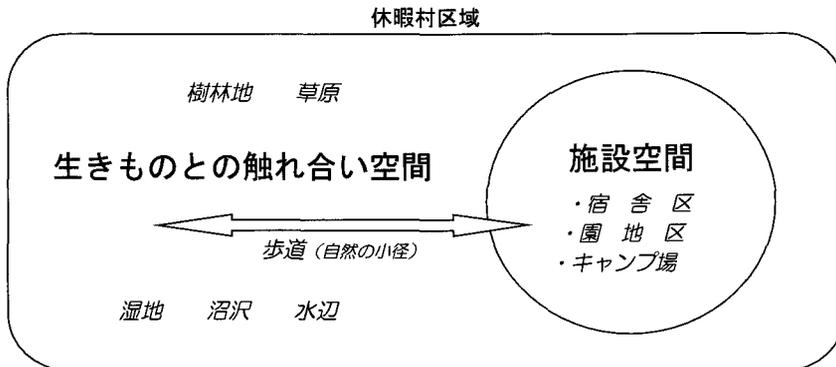


図3 圍繞景観の空間区分

表2 囲繞景観の評価平均値

空間	価値軸	評価項目	5段階評価				近江八幡 評価値	大山鏡ヶ成 評価値	
			5	4	3	2			1
			(非常に)－(やや)－(どちらでもない)－(やや)－(非常に)						
施設空間	普遍価値	1 自然性	緑が豊か	—	緑が少ない	4.7	4.7		
		2 多様性	多様な自然	—	単純な自然	4.5	4.5		
		3 眺望性	見通しがよい	—	見通しが悪い	4.7	4.6		
		4 清涼性	すがすがしい	—	うっとうしい	4.7	4.7		
		5 開放性	開放的な	—	閉鎖的な	4.4	4.6		
		6 力量性	壮大な	—	貧弱な	4.3	4.5		
		7 統一性	まとまりがある	—	まとまりがない	4.3	4.2		
		8 快適性	快適な	—	不快な	4.5	4.6		
		9 審美性	美しい	—	醜い	4.6	4.6		
		10 安全性	安全で安心な	—	不備で不安な	4.4	4.5		
	固有価値	11 郷土性	古里的な	—	都会的な	4.1	4.1		
		12 愛着性	愛着がある	—	愛着がない	4.2	4.1		
生きものとの触れ合い空間	普遍価値	① 多様性	種類が多い	—	種類が少ない	3.3	3.3		
		② 視認性	目に触れやすい	—	目に触れにくい	3.3	3.1		

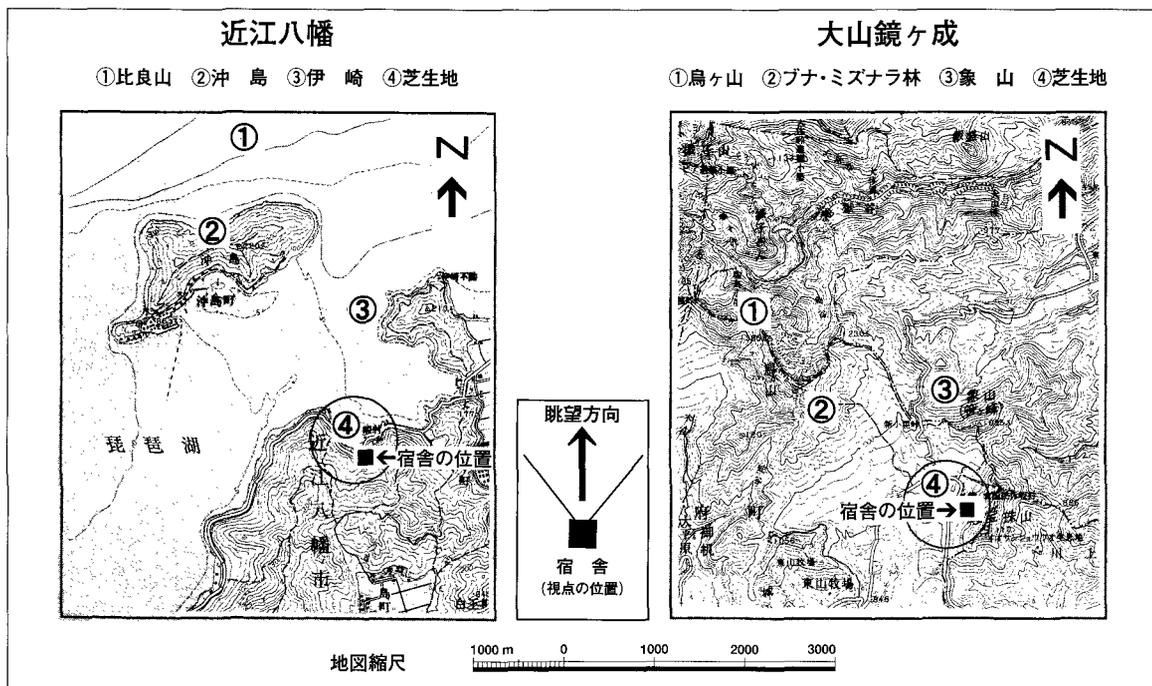


図4 眺望対象の位置図

1) 囲繞景観

囲繞景観は身の回りの景観として認知される景観で、空間的な広がりや環境は表1に示した。囲繞景観を図3に示すように宿舎区、園地区およびキャンプ場の施設空間と植物、昆虫、野鳥など生きものとの触れ合い空間とに分け、この施設空間

と生きものとの触れ合い空間に対するアンケートの評価項目は、次のように空間区分別に設定した。

施設空間の評価項目は、表2に示したように自然性、眺望性など、誰もが普遍的に共有する「普遍価値」を評価する10項目と、郷土性など特定

の地域や回答者に固有な「固有価値」を評価する2項目、合わせて12項目を設定した。この評価項目設定にも松井孝子、酒井学の研究論文⁶⁾参考にした。

生きものとの触れ合い空間の評価については植物、昆虫、野鳥などに関する多様性、視認性の2項目を設定した。評価項目は、いずれも5段階評価とした。

2) 眺望景観

眺望景観は、宿舎(視点の位置)から可視できる山岳、島嶼などの主要な眺望対象によって形成されている。アンケートは、来訪者にこれらの主要眺望対象のうち、最も印象に残る眺望対象を選択してもらい、その結果を分析して眺望景観の特徴を把握しようとするものである。眺望対象は図4に示したように、各休暇村に4カ所を設定し、アンケートではそのうちから1カ所を選択する方法とした。

2カ所の休暇村における眺望対象の選定は、あらかじめ休暇村職員と休暇村来訪者から休暇村およびその周辺にある山岳、植生、池沼など印象に残る眺望対象を数カ所あげてもらい、そのうちの上位4カ所を主要な眺望対象として選定した。眺望対象名、視点場(視点の位置)として設定した宿舎から眺望対象までの視距離、視角、自然公園計画の地種区分^{註1)}については表5に示したとおりである。

(3) アンケートの実施

アンケートの対象者(回答者)は休暇村の来訪者(20歳以上の宿泊利用者)とし、アンケート用紙は宿舎のフロント職員が直接手渡し、回答記入後の用紙はフロントで回収した。アンケート期間は2カ所の休暇村とも平成14年(2002)10月1日から10月31日までの31日間である。アンケートは、近江八幡は211名に配布し有効回答者数185名、有効回答率88%であり、大山鏡ヶ成は190名に配布し有効回答者数169名、有効回答率89%であった。

3. 結果

(1) 圍繞景観の評価

近江八幡および大山鏡ヶ成における圍繞景観の評価結果は、表2に示したとおりである。評価値は有効回答者の評価の平均である。なお、施設空間の評価項目は、自然性など物質的な判断項目から愛着性など心象的な判断項目の順に配列した。

1) 近江八幡

施設空間に対する12項目の評価を高い順に示すと、最も高いのは自然性、眺望性、清涼性の4.7である。次に、審美性の4.6、多様性および快適性は4.5である。開放性および安全性は4.4、力量性および統一性は4.3である。これら「普遍価値」を評価する項目の評価が4.3以上であるのに対し、「固有価値」の評価は、愛着性4.2、郷土

表3 圍繞景観の男女別評価平均値

空間	評価項目	5段階評価					近江八幡		大山鏡ヶ成	
		5	4	3	2	1	評価値		評価値	
		(非常に)ー(やや)ー(どちらでもない)ー(やや)ー(非常に)					男	女	男	女
施設空間	1 自然性	緑が豊か	—	緑が少ない	4.7	4.6	4.8	4.6		
	2 多様性	多様な自然	—	単純な自然	4.4	4.4	4.5	4.5		
	3 眺望性	見通しがよい	—	見通しが悪い	4.7	4.7	4.6	4.6		
	4 清涼性	すがすがしい	—	うっとうしい	4.6	4.7	4.7	4.7		
	5 開放性	開放的な	—	閉鎖的な	4.5	4.4	4.5	4.7		
	6 力量性	壮大な	—	貧弱な	4.3	4.2	4.4	4.5		
	7 統一性	まとまりがある	—	まとまりがない	4.3	4.1	4.2	4.3		
	8 快適性	快適な	—	不快な	4.5	4.5	4.5	4.5		
	9 審美性	美しい	—	醜い	4.6	4.5	4.5	4.6		
	10 安全性	安全で安心な	—	不備で不安な	4.5	4.4	4.4	4.5		
	11 郷土性	古里的な	—	都会的な	4.0	4.2	4.1	4.2		
	12 愛着性	愛着がある	—	愛着がない	4.2	4.1	4.1	4.3		
生きものとの触れ合い空間	① 多様性	種類が多い	—	種類が少ない	3.3	3.3	3.3	3.4		
	② 視認性	目に触れやすい	—	目に触れにくい	3.3	3.2	3.0	3.4		

性 4.1 と「普遍価値」を下回っている。

生きものとの触れ合い空間については、多様性および視認性の評価は 3.3 で、施設空間の評価を下回る低い値となっている。

2) 大山鏡ヶ成

施設空間における評価を高い順に示すと、最も高い値は自然性および清涼性の 4.7 である。次に眺望性、開放性、快適性および審美性の 4 項目が 4.6 で、多様性、力量性および安全性は 4.5、統一性が 4.2 と最も低かった。このように「普遍価値」の評価は 4.2 以上となっているが、「固有価値」の評価は、郷土性および愛着性ともに 4.1 で「普遍価値」を下回っている。

生きものとの触れ合い空間については、多様性は 3.3、視認性は 3.1 で、施設空間の評価を下回る低い値となっている。

3) まとめ

以上の結果から、近江八幡および大山鏡ヶ成における施設空間の自然性、眺望性、清涼性および審美性は、共通して評価が 4.6 以上の高い評価を得ているに対し、郷土性および愛着性は、2カ所の休暇村とも評価は 4.2 以下の評価となっており、休暇村利用者には施設空間は普遍的価値の方が固有的価値よりも高く評価されていることが把握された。

また、生きものとの触れ合い空間の評価は、2カ所の休暇村とも 3.3 以下の低い評価となっている。ただし、アンケートの時期が 10 月であること、植物、昆虫、野鳥などの生きものの種類によっては見ることができる時期⁷⁾が異なることを考慮しておく必要がある。

(2) 男女別圍繞景観の評価

近江八幡および大山鏡ヶ成における圍繞景観の男女別評価の結果は、表 3 に示したとおりである。なお、性別を記載していない回答者がいたため、近江八幡は有効回答者が男性 81 名、女性 62 名の計 143 名で、大山鏡ヶ成は有効回答者数が男性 76 名、女性 58 名の計 134 名である。

1) 近江八幡

施設空間に対する評価では、男性の最高評価は、自然性および眺望性の 4.7 で、次に清涼性および審美性の 2 項目が 4.6 である。男性で評価が低か

ったのは愛着性の 4.2、郷土性の 4.0 である。女性の最高評価は、眺望性および清涼性の 4.7 で、眺望性は男性と同じ値である。続いて自然性が 4.6 である。女性で評価が低いのは力量性、郷土性が 4.2、統一性、愛着性が 4.1 であった。

以上のことから、男性が最も高く評価しているのは自然性および眺望性、女性は眺望性および清涼性で、男女とも共通する高い評価項目は自然性、眺望性、清涼性である。これに対し、低い評価は男女とも郷土性、愛着性であることが明らかになった。

生きものとの触れ合い空間における多様性および視認性の評価は、男性 3.3、女性は 3.3 および 3.2 で、男女ともほぼ同様の低い評価結果であった。

2) 大山鏡ヶ成

施設空間に対する評価では、男性の最高評価は、自然性の 4.8 である。次に清涼性が 4.7、眺望性が 4.6 と続いた。評価が低かったのは統一性 4.2、郷土性と愛着性が 4.1 であった。女性の最高評価は、清涼性および開放性の 4.7 で、清涼性は男性と同じである。続いて自然性、眺望性および審美性の 3 項目が 4.6 であった。評価が低かったのは統一性と愛着性の 4.3、郷土性の 4.2 であった。

以上の結果から、男性が最も高く評価している項目は自然性、女性は清涼性および開放性であり、男女に共通する高い項目は自然性、眺望性、清涼性である。また、低い評価項目としては男女ともに郷土性、愛着性であることが明らかになった。

生きものとの触れ合い空間に対する多様性および視認性の評価は、男性が 3.3 および 3.0、女性は 3.4 で、女性が男性をやや上回っているが、男女とも評価は低く、この評価結果は近江八幡と同様であった。

3) まとめ

近江八幡、大山鏡ヶ成の 2カ所の休暇村の施設空間に対する評価で男性も女性も共通している点は、自然性、眺望性、清涼性に対する高い評価を与えていることである。このことは、休暇村整備にあたり、自然公園における集団施設地区にふさわしい整備努力の結果として自然の豊かさ、眺めのすばらしさ、さわやかさを感じさせる施設づくりが実現していることが検証されたと捉えること

表 4 圍繞景観の評価項目間の相関係数

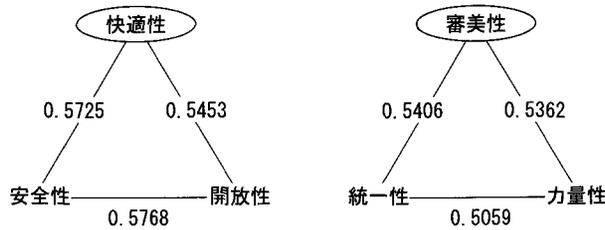
[A] 近江八幡

単相関	自然性	多様性	眺望性	清涼性	開放性	力量性	統一性	快適性	審美性	安全性	郷土性	愛着性
自然性	1.0000											
多様性	0.4303	1.0000										
眺望性	0.2367	0.1998	1.0000									
清涼性	0.2279	0.2654	0.5670	1.0000								
開放性	0.3469	0.5387	0.2267	0.2985	1.0000							
力量性	0.3782	0.4114	0.4169	0.4574	0.4211	1.0000						
統一性	0.3440	0.4439	0.3850	0.4669	0.5044	0.5059	1.0000					
快適性	0.3394	0.3301	0.3036	0.3594	0.5453	0.3446	0.4266	1.0000				
審美性	0.4145	0.3444	0.5000	0.4232	0.3719	0.5362	0.5406	0.3632	1.0000			
安全性	0.3526	0.3404	0.2316	0.3024	0.5768	0.3490	0.4095	0.5725	0.3029	1.0000		
郷土性	0.2661	0.2942	0.2998	0.3138	0.3624	0.3661	0.3940	0.3340	0.3114	0.3401	1.0000	
愛着性	0.3224	0.3670	0.3108	0.3931	0.4868	0.4329	0.4880	0.4512	0.4128	0.4339	0.5081	1.0000

[B] 大山鏡ヶ成

単相関	自然性	多様性	眺望性	清涼性	開放性	力量性	統一性	快適性	審美性	安全性	郷土性	愛着性
自然性	1.0000											
多様性	0.6320	1.0000										
眺望性	0.4894	0.3679	1.0000									
清涼性	0.6445	0.5342	0.6642	1.0000								
開放性	0.5886	0.5663	0.5334	0.6600	1.0000							
力量性	0.4940	0.5607	0.5737	0.6823	0.6013	1.0000						
統一性	0.4236	0.5196	0.5397	0.6530	0.4734	0.6492	1.0000					
快適性	0.4493	0.4566	0.5604	0.6641	0.6273	0.6163	0.6137	1.0000				
審美性	0.6085	0.6093	0.5685	0.7446	0.5937	0.7266	0.6550	0.6083	1.0000			
安全性	0.4380	0.4090	0.4172	0.5117	0.6891	0.4599	0.5362	0.6693	0.5267	1.0000		
郷土性	0.4224	0.4848	0.4044	0.4978	0.4099	0.4465	0.4966	0.5749	0.4937	0.4231	1.0000	
愛着性	0.4752	0.4916	0.4239	0.5014	0.4794	0.4463	0.4388	0.5549	0.5549	0.5308	0.6099	1.0000

[A] 近江八幡



[B] 大山鏡ヶ成

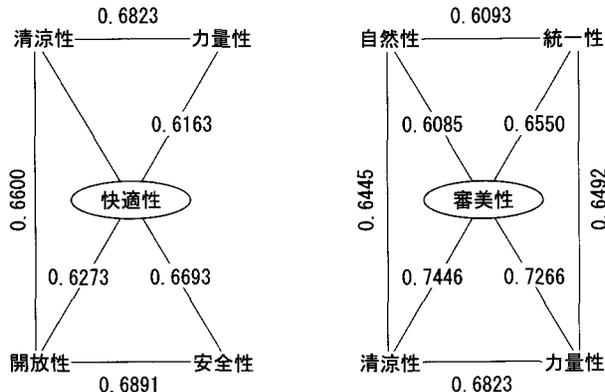


図 5 評価項目間の相関関係

ができる。

なお、2カ所の休暇村ともに男性は自然性に最も高い評価を与え、女性は清涼性を最も高く評価した。

これに対し、2カ所の休暇村とも男女共通して郷土性、愛着性の2項目は、評価が低かった。休暇村来訪者は旅行者であり、滞在時間が短いから施設空間に郷土性、愛着性を感じ取ることができなかったと理解される。

また、生きものとの触れ合い空間に関しては、男性も女性も施設空間に比較して評価が低い点は2カ所の休暇村に共通している。

(3) 圍繞景観の評価結果の相関分析

圍繞景観に対するアンケートで得た評価データを用い、評価項目間の相関係数を求め、表4に示した。表4から各休暇村の圍繞景観が利用者にとのよう評価されているか、その特徴を分析した。なお、相関係数については、統計学関係の図書にある相関係数の性質の説明内容^{註2)}から判断し、0.5～0.7未満を「相関がある」、0.7以上を「強い相関がある」とした。

1) 近江八幡

近江八幡の評価項目間の相関は表4の[A]である。

相関係数が0.7以上の強い相関が認められる項目間は算定されなかった。相関係数が最も大きいのは、開放性と安全性で0.5768、この他に快適性と安全性、眺望性と清涼性など評価項目の11の組み合わせで相関係数0.5以上が算定され、評価項目間の相関が認められる。しかし、近江八幡の評価項目間の相関係数は全体的に小さく、相関が認められない項目間が多く存在する。

その中で開放性の評価項目は、安全性、快適性、統一性との間で相関係数が0.5以上の相関が認められる。また、審美性の評価項目が眺望性、力量性、統一性との間で相関係数が0.5以上の相関が認められる。圍繞景観の固有性を評価する郷土性と愛着性との間は、相関係数0.5以上であり相関が認められる。

このことをふまえて各評価項目間の関係を整理したところ、図5の[A]に示す二つの相関関係のグループが把握された。すなわち、近江八幡の利

用者が感じている圍繞景観の快適性は、開放性、安全性の評価と関連しており、また、審美性は空間のまとまりの統一性と空間の大きさの力量性の評価と強く関連していることが示唆される。

この二つの相関関係は、近江八幡の圍繞景観の特性を表していると判断でき、その特性の一つは快適性、開放性、安全性の3評価項目の相関関係から、安全で安心な、開放的な快適空間を、もう一つは審美性、統一性、力量性の3評価項目の相関関係から、大きさは少ないがまとまりのある美しい景観と考察される。

2) 大山鏡ヶ成

大山鏡ヶ成の評価項目間の相関は表4の[B]である。

相関係数が最も大きいのは、審美性と清涼性との間で相関係数が0.7446と強い相関が認められ、また、審美性と力量性の間にも0.7266の強い相関が得られた。

審美性は、清涼性、力量性以外にも自然性、多様性など7項目との間に相関係数0.5以上の相関が認められる。このうち、自然性、多様性、統一性、快適性の4項目との間は相関係数0.6以上である。すなわち、審美性に対する評価は、自然性、多様性、清涼性、力量性、統一性、快適性の各項目と相関係数が0.6以上の相関が存在するので、この6項目と関係が深いと指摘できる。

同様に、快適性は眺望性、清涼性など7項目との間に相関係数0.5以上の相関が認められる。このうち、清涼性、安全性、開放性、力量性、統一性、審美性との間は相関係数0.6以上の相関が存在し、清涼性、安全性、開放性、力量性が快適性評価に強く関連していることが示唆される。なお、清涼性は自然性、開放性、力量性、審美性との間に相関係数0.6以上の相関が存在するので、清涼性はこの4項目と関係が深いことが指摘される。

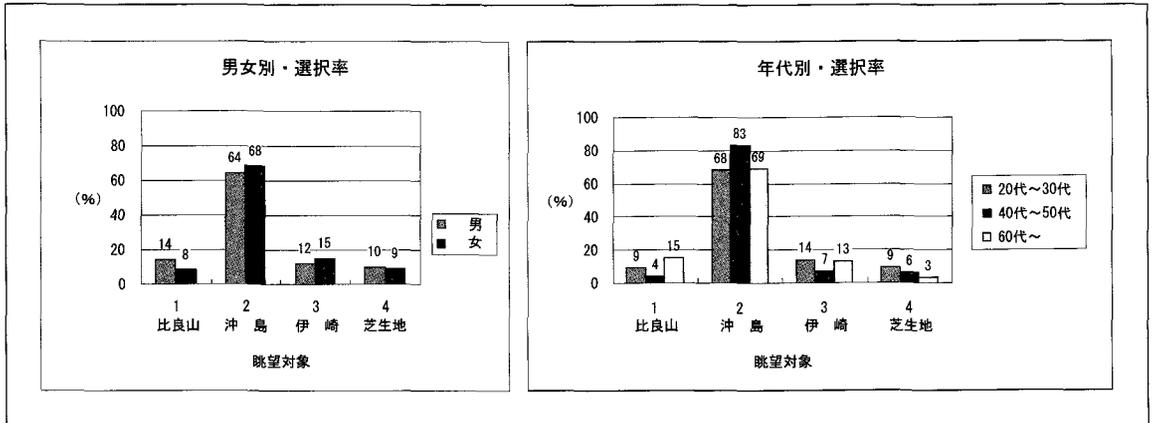
大山鏡ヶ成では、審美性、快適性、清涼性の3項目が、多数の評価項目との間に相関係数0.6以上の相関が認められることから、3評価項目は大山鏡ヶ成の圍繞景観の総体的特性を表すキーワード的性格をもっていると考えられる。なお、圍繞景観の固有性を評価する郷土性と愛着性との間は、相関係数0.6以上であり相関が認められる。

表5 眺望対象(4カ所)の視距離、視角および自然公園計画

休暇村	視点場 (標高)	眺望対象		視距離	視角	自然公園計画	
		(地形・標高)				視点→対象	俯角/仰角
近江八幡	86m	①	比良山 (山岳: 1,174m)	20.0km	仰角 3.1°	第2種特別地域	琵琶湖 国立公園
		②	沖島 (島嶼: 220m)	2.5km	仰角 3.1°	第2種特別地域	
		③	伊崎 (岬: 125m)	1.6km	仰角 4.5°	第2種特別地域	
		④	芝生地 (広場: 90m)	0.3km	俯角 0.2°	第2種特別地域	
大山鏡ヶ成	915m	①	烏ヶ山 (山岳: 1,448m)	2.3km	仰角 13.2°	特別保護地区	大山隠岐 国立公園
		②	ブナ・ミズナラ林 (森林: 1,000m)	1.1km	仰角 4.4°	第3種特別地域	
		③	象山 (山岳: 1,085m)	0.9km	仰角 10.8°	第3種特別地域	
		④	芝生地 (広場: 915m)	0.1km	俯角 0.0°	第2種特別地域	

注) 視点場の標高は宿舎の位置の標高

[A] 近江八幡



[B] 大山鏡ヶ成

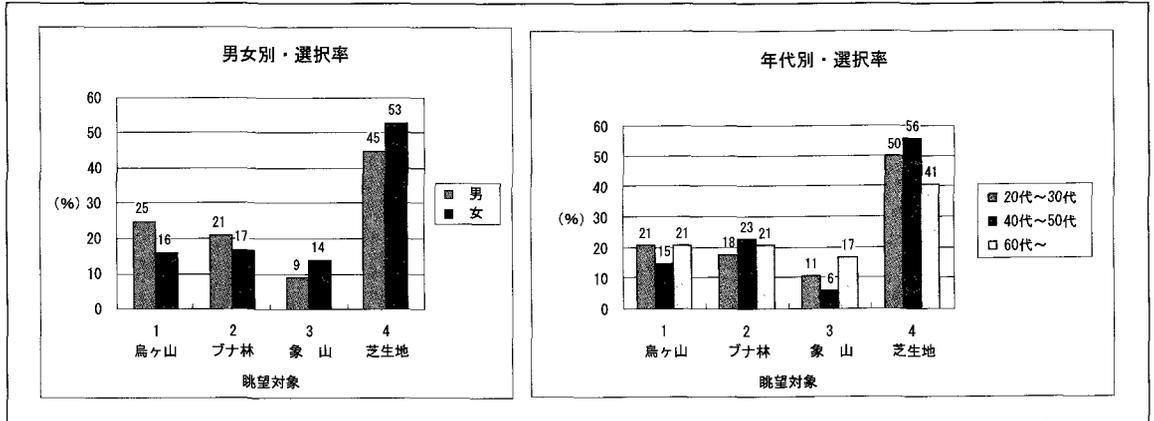


図6 眺望対象(4カ所)の男女別・年代別選択状況

これらをふまえ、評価項目間の関係を整理したところ、図5の[B]に示す二つの相関関係のグループが把握された。この二つの評価項目間の相関関係は、大山鏡ヶ成の圍繞景観の特性を示すものである。相関関係のグループから示唆される特性の一つは、緑豊かな清涼感のある壮大で美しい景観、もう一つは安全で安心な、大きく開放的なすがすがしい快適な景観と判断できる。

(4) 眺望景観の評価

アンケートは、提示した4カ所の眺望対象(表5)から最も印象的なものを1カ所選んで回答する方法とした。

近江八幡の男女別有効回答者数は男性81名、女性62名の計143名で、年代別の有効回答者は20代～30代21名、40代～50代54名、60代以上は68名の計143名である。

大山鏡ヶ成の男女別有効回答者数は男性76名、女性58名の計134名で、年代別の有効回答者は20代～30代28名、40代～50代48名、60代以上は58名の計134名である。

1) 近江八幡

主要眺望対象の男女別および年代別の選択状況は、図6の[A]に示したとおりで、この回答は4カ所のうち最も印象的と判断するものを1カ所選択した結果であるから、眺望対象に対する印象の強弱を知ることができる。

男女別の選択結果で、最も高い選択率は「沖島」で、男性の64%、女性の68%であった。次ぎは「伊崎」で男性は12%、女性は15%と、男女ともほぼ同じ選択率となっている。「比良山」は男性が14%に対し女性は8%と低く、「芝生地」は男女とも10%以下と、「沖島」が圧倒的な高い選択率となっている。

年代別の選択結果は、各世代を通じて「沖ノ島」の選択率が高く、20代～30代は68%、40代～50代は83%、60代以上は69%である。「沖島」以外の「比良山」、「伊崎」、「芝生地」は、各年代を通じて選択率は低く、各対象毎の最も高い選択率は「比良山」は60代以上の15%、「伊崎」は20代～30代の14%、「芝生地」は20～30代の9%であった。

「沖島」は男女別、年代別とも他の眺望対象と

は大差の選択率である。「沖島」の景観は、近江八幡の特有の眺望景観として最も強い印象を与え、多くの来訪者に評価されていることが明らかになった。

2) 大山鏡ヶ成

主要眺望対象の男女別および年代別の選択状況は、図6の[B]に示したとおりで、この結果は眺望対象に対する印象の強弱を示している。

男女別の選択評価で、最も高い選択率は「芝生地」である。男性は45%、女性は53%で女性の選択率が高い。次は男性が「烏ヶ山」の25%、女性は「ブナ・ミズナラ林」の17%である。「象山」は男性9%、女性14%、男女ともに選択率は一番低かった。

年代別の選択結果は、「芝生地」の選択率が20代～30代は50%、40代～50代は56%、60代以上は41%で、年代間を比較すると40代～50代の選択率が高い特徴がある。芝生地の安全で安心な空間が強い印象を与えたものと推測できる。

「芝生地」の外は、「烏ヶ山」は、20代～30代、60代以上、「ブナ・ミズナラ林」は40代～50代、「象山」は60代以上と年齢が高い利用者の選択率が高い。

以上のように、「芝生地」が最も高い選択率を得て、眺望対象として強い印象を与えており、大山鏡ヶ成の眺望景観の特徴は、広大で平坦な芝生地に象徴されることが明らかになった。

4. 考察

本研究では、近江八幡と大山鏡ヶ成の2カ所の休暇村で圍繞景観と眺望景観についてアンケートを行い、景観評価および眺望対象の選択結果の分析を行ってきたが、これらを通じて、次のように考察することができる。

① 圍繞景観の形成に果たした立地環境の役割

近江八幡と大山鏡ヶ成の圍繞景観の評価において、最も高い評価を得た評価項目は、表2で確認できるとおり、緑が豊かな自然性とすがすがしさを感じる清涼性の2項目である。その要因は、2カ所の休暇村の土地の選定と立地環境にあると指摘することができる。

昭和35年(1960)、厚生省(現環境省)は「国民休暇村計画」を発表し、その第一次指定地として

近江八幡および大山鏡ヶ成を含む10ヵ所を選定した。計画では、既設の集団施設地区の再整備ではなく、新たな集団施設地区を整備することを目指した。すなわち「国民休暇村」は既存の公園利用地や観光地を避け、未開発の土地を選定したのである⁸⁾。近江八幡は琵琶湖の東岸の国有地(国有林)および近江八幡市所有地に、大山鏡ヶ成は、既設の大山寺集団施設地区の南東5kmに位置する標高920mの江府町有地を選定した。2ヵ所の休暇村の土地は公有地であり、これらの公園専用地に自然環境を配慮して、計画的に総合的に施設の整備を行なった結果、緑豊かな圍繞景観の形成が可能になった。そして、この土地選定こそ近江八幡は琵琶湖湖畔の水辺の清涼感、大山鏡ヶ成は標高1,000mに近い高原特有の清涼感を享受できる休暇村整備につながったと考えることができる。

② 休暇村における快適性と審美性の特徴

施設空間における評価項目間の相関分析の結果、図5に示すように「快適性」を軸とする複数の項目が相関するグループが存在する。この快適性グループは、近江八幡は安全性と開放性、大山鏡ヶ成では、それらに加えて清涼性と力量性が相関する。何れの休暇村においても快適性と安全性との相関係数が認められ、休暇村における快適性の特徴は、安全を基調とする快適さにあると指摘することができる。休暇村の利用の主目的は休養、探勝であると考えられ、安全で安心して利用されることが重要である。その実現を目指して施設を整備し、持続的に管理してきたことが安全な快適空間の形成に貢献していると考えられる。

審美性については、近江八幡は統一性と力量性、大山鏡ヶ成では、それらに加えて自然性と清涼性とも相関が認められる。何れの休暇村も審美性は、統一性、力量性と相関があるが、大山鏡ヶ成の審美性は清涼性、力量性と相関が強い特徴を示している。このことから考え、近江八幡は、まとまりある美しさが、大山鏡ヶ成は高原の広々とした壮大さと高原特有のすがすがしい清涼な感じの美しさが特徴といえる。

③ 宿舎を中心とする施設配置の特徴

圍繞景観の快適性の高い評価の要因は、休暇村の施設の構成と配置にあると認められる。図3お

よび表1に示したように、休暇村は、宿舎、園地およびキャンプ場を中核に、その周辺に保全緑地を設ける施設配置を基本とする。まず、宿舎は最も眺望のすぐれた位置に建設され視点場としての役割を果たす。宿舎に接して樹林や芝生を主体とする園地を設け、中でも芝生の園地は大規模に整備し、近江八幡では区域の約56%、大山鏡ヶ成は約40%が芝生地で占められている。この広大な芝生の空間が、快適性を高める物理的な要因と考えられる。

④ 貧弱な生きものとの触れ合い環境

花のある草本類や壘昆虫、鳥類、両生類などの野生生物が目に触れる度合いは、近江八幡および大山鏡ヶ成ともに低い評価となった。その要因は、アンケート実施が10月であったため、生きものの活動が活発な夏の時期をはずれていたことも一因と思われるが、実態的には休暇村区域内における生物相の貧弱さにあると指摘できる。

近江八幡の休暇村造成以前の土地は、大部分が水田や水路、周辺の低木林とともに生きものにとってすぐれた生息・生育環境であった。しかし、水田の乾陸化による土地造成によって生息・生育環境が改変され、現在では部分的に回復されているに過ぎない。大山鏡ヶ成の場合も、ササ草原や湿地が施設用地として土地造成されたために、現在では一部の湿地と沼沢を残すのみである。以上のように、2ヵ所の休暇村では野生生物の生息・生育環境が大幅に失われ、休暇村開設後すでに40年が経過しているが、自然の回復が遅れて生息・生育環境がいまだに貧弱な状況にあり、評価が低いものになったと考えられる。

⑤ 眺望対象の選択結果とその要因

近江八幡の4ヵ所の眺望対象のうち、最も印象に残る対象は、男性も女性も、また年代別でも「沖島」であった。休暇村の沖合2.5kmの湖上に浮かぶ沖ノ島は、表4に示したように仰角3.1の眺望対象である。この視角は「仰角5°以下の場合には容易に山容全体が見え、スカイラインが視覚的に卓越した重要性をもつ」という知見⁹⁾に合致する角度であり、また、距離的には視点(宿舎)から約2.5kmの中景域に存在し、国定公園第2種特別地域に指定され自然が保全されている景観であることなどにより、最も強い印象に残る眺望対

象として、高い選択率を得たものと考察される。

大山鏡ヶ成では、4対象のうち、「芝生地」が男女別、年代別とも最も高い選択率を得た。特に、40～50代の女性の56%が芝生地を選択しており、その要因は芝生の広々とした開放的な快適感が影響しているものと考えられる。

5. 結論

本研究は、近江八幡および大山鏡ヶ成における圍繞景観と眺望景観を対象に、圍繞景観については景観構成の特徴とその評価を行い、施設との関連を考察するとともに、眺望景観については眺望対象を特定し、その中から最も印象に残る対象の選択結果を分析し、その要因を考察することを目的とした。

研究の方法は、休暇村来訪者に対するアンケート、資料、文献調査および現地調査を行い、そこで得たデータに考察を加えた。その結果から次の結論を得た。

- ①近江八幡および大山鏡ヶ成における圍繞景観は自然性、眺望性、清涼性および審美性が高く評価された。その要因は、2カ所の休暇村とも既存の観光地から遠隔のすぐれた自然地域に立地し、施設は宿舎を中心に必要最小限の施設規模に留めた結果である。
- ②2カ所の休暇村には「快適性」と「審美性」を軸とする複数の評価項目間で相関が認められる2つの評価項目のグループが存在する。特に、快適性は安全性との相関が高く、安全を基調とする快適な空間形成が休暇村の特徴と把握された。
- ③生きものとの触れ合いに関する評価は低い。その要因は、近江八幡および大山鏡ヶ成ともに施設整備に必要な土地造成が行なわれ、それまでに存在した水田、湿地、草原などの生息環境の改変による生物相の貧弱さにある。
- ④来訪者に最も印象に残る眺望対象は、近江八幡においては「沖島」が、大山鏡ヶ成においては「芝生地」が高い選択率を得た。

6. 今後の課題

本論文は、休暇村利用者が、休暇村内の景観と休暇村宿舎から眺望される景観に対し、どのよう

な評価を与えているかを、休暇村の協力を得て現地においてアンケートを行い、その回答を分析、考察して研究を行った。

アンケートは平成14年(2000)10月の1ヶ月間のため季節は秋である。アンケートを1ヶ月にしたのは、回答数を一定量確保したいと考えたためである。天候の良い日にアンケートは実施しているが、調査の同一日実施、天候は朝、日中、夕方では移ろうため、アンケート実施時刻の限定、利用者が休暇村へ来訪した目的、宿泊者の滞在日数、滞在した部屋からの展望状況など、景観体験による景観への意識や評価に関わりそうな事項については今回は取り上げなかった。今後は、こうした景観体験に関わる事項も調査項目に入れるとともに、秋以外の季節にもアンケートを行なうことが研究を深めていく課題と考える。

謝辞

本研究にあたり、(財)休暇村協会には資料のご提供いただくとともに、休暇村近江八幡および大山鏡ヶ成の職員の方々からアンケート実施方法のご指導、用紙の配布・回収等のご協力をいただき、宿泊者の方々には貴重な回答を寄せていただきました。ここに記し深く感謝の意を表します。

補註

1) 自然公園の地種区分

国立公園など自然公園の優れた風致景観を有する地域は、保護計画に基づいて特別地域に選定される。特別地域は風致景観の特質により特別保護地区、特別地域(第1種、第2種、第3種)に区分される。第1種特別地域は特別保護地区に準ずる景観を有し、第2種は第1および3種以外の地域で、第3種は風致を維持する必要性は比較的低い地域である。

(環境庁：国立公園の公園計画作成要領，1980)

2) 松本望著「わかりやすい統計学」(丸善出版) 97-100頁の相関係数の説明には、相関係数0.5を境に相当意味が違うことが説明されている。相関係数の性質については、多くの図書に下記の内容の説明がある。

$$\textcircled{1} \quad -1 \leq r \leq 1$$

② $|r|$ が 1 に近い程関係が強く、0 に近い程関係が弱い。そして $|r| > 0.5$ ならば相当の関係があり、 $|r| < 0.5$ ならば余り相関関係がないとみてよい。

③ r が正ならば順相関、負ならば逆相関である。

そこで本研究では、0.5～0.7未満を「相関がある」、0.7以上を「強い相関がある」とした。1に近い相関係数なら極めて強い相関があると判断できるが、本研究では1に近い相関は存在しなかった。

引用文献

- 1) 堀繁, 植田明浩, 篠原修: 国民休暇村にみる自然公園集団施設地区の計画思想, 造園雑誌, 53 (5), 181-186, 1990.
- 2) 番匠克二, 堀繁: 集団施設地区にみる国立公園の利用拠点の考え方とその変遷, 造園雑誌, 55 (5), 247-252, 1991.
- 3) 樋口忠彦: 国立公園集団施設地区の景観についての考察, 国立公園, 325, 11-17, 1976.
- 4) 油井正昭, 古谷勝則, 木曾次郎: 国民休暇村におけるインタープリテーション活動に関する研究, 千葉大学園芸学部学術報告, 第50号, 135-148, 1996.
- 5) 加治隆: 休暇村の立地過程と野外レクリエーション空間構造及び利用形態の特徴, レジャー・レクリエーション研究, 第52号, 23-36, 2004.
- 6) 松井孝子, 酒井学: 「自然との触れ合い」分野におけるアセスメント手法, PREC Study Report, vol.06, 57pp, 2000.
- 7) 日本野生植物研究センター: 大山の動植物, (財)自然公園美化管理財団, 48pp, 1991.
- 8) (財)休暇村協会: 休暇村の設置経緯資料, 第1期休暇村, 昭和37年～昭和44年, 2002.
- 9) 樋口忠彦: 景観の構造, 技報堂, 41-63, 1975.

(受付: 2006年12月2日)
(受理: 2007年6月27日)